

障害のある子どもの 保育・教育

一心に寄り添う援助をめざして—

小竹利夫・芳野正昭・矢野洋子・猪野善弘 編著

井手裕子・内川義和・大塚 登・岡野真弓・川邊浩史
小竹仁美・小堀晶弘・是松いづみ・栗石弘文・中村理美
本田和也・松山郁夫・八十田晶子 共著



はしがき

近年、保育所や幼稚園、認定こども園など保育・教育の現場では、障害のある子ども、障害がなくても発達が気になる子ども、虐待を含めた家庭環境の問題が疑われる子どもなど、特別な配慮を必要とする子どもが増えたといわれています。そうした子ども自体が増加したのか、社会の変化を通して特別な配慮を必要とする子どもを捉えやすくなったことによるものなのかは、一概にはいえません。しかし、そのような子どもたちやケースの増加・多様化への対応の必要性を、社会が認識していることには変わりはなく、多様な子どもたちが共に育つ保育・教育が模索されるようになりました。

これらの状況を踏まえ、保育・教育の各分野で専門職をめざす学生がこのような子どもたちを正しく理解できるよう、できるだけわかりやすく、実際に役立つ障害児保育・教育のテキストを作成することは、喫緊の課題であり、社会の要請に応えるものといえましょう。

こうした趣旨の下、以下の点を特徴として本書の出版を企画しました。

- ① 2019年度より実施の保育士養成課程、教職課程コアカリキュラムに対応した入門テキストとして編集しました。保育士、幼稚園教諭、保育教諭などをめざす学生が、一人で読んでも学べるように、わかりやすく読み手に語りかけるように執筆しました。
- ② 保育所、幼稚園、認定こども園などでの実習や就職してからの実際の支援に結び付けることができるように、各章・各節に具体的なエピソードを掲載しました。
- ③ 子どもの表面的な行動・態度だけでなく、気持ち（内面）に寄り添う保育・教育を基調にし、全編を通して大事にしました。

本書が、特別な配慮を必要とする子どもの気持ち、さらにはその保護者の気持ちに寄り添い、特別な配慮を必要とする子どもの育ちを援助することができる保育者・教育者の養成に寄与することを、心から願っています。

最後に、本書を刊行するにあたり、本書の趣旨に賛同して執筆を引き受けて下さいました執筆者の皆さま、そして企画・編集を通して温かく支えて下さいました建帛社の方々に、心より感謝申し上げます。

2020年1月

編者一同

＊ 目 次 ＊

第1章 障害のある子どもの保育・教育を支える理念

1

1 障害のある子どもの保育・教育の基本 1

- (1) 障害のある子どもとの出会い 1
- (2) 障害の理解から障害のある子どもの理解へ 2
- (3) 行動を見る視点から気持ちを見る視点へ 3
- (4) 気持ちを受け止め、心を育てる 4
- (5) 気持ちを受け止める関係から受け止め合う関係へ 5
- (6) 子ども同士が育ち合う関係を築く 5
- (7) 子どもの^{いま}現在を充実させる 7

2 「障害」の概念と障害児保育の歴史的変遷 8

- (1) 障害とは何か 8
- (2) 障害の概念 8

コラム 星野さんの生き方が教えてくれるもの 9

- (3) 障害児保育の理念 10
- (4) 障害児保育の歴史的変遷 10

コラム 知的発達症の子どもたちに生涯を捧げた石井筆子 11

3 障害のある子どもの地域社会への参加・包容および合理的配慮 13

- (1) 地域社会への参加 13
- (2) 障害者差別解消法 14
- (3) 合理的配慮 15
- (4) インクルージョン (Inclusion) 17
- (5) 障害のある子どもを地域で支援するための専門的役割 18

コラム 自然に接する子どもたち 20

第2章 肢体不自由・知的発達症のある子どもの理解と援助

21

1 肢体不自由のある子どもの理解と援助 21

- (1) 肢体不自由のある子どもの理解 21
- (2) 肢体不自由のある子どもへの援助の方法 22

2 知的発達症のある子どもの理解と援助27

- (1) 知的発達症のある子どもの理解 27
- (2) 知的発達症のある子どもへの援助の方法 30
- (3) ダウン症の子どもへの援助 34
- (4) 関係機関との連携 35

コラム ルールを変える 36

第3章**視覚障害・聴覚障害・言語障害のある子どもの理解と援助****38****1 視覚障害のある子どもの理解と援助38**

- (1) 視覚障害のある子どもの理解 38
- (2) 視覚障害のある子どもへの援助の方法 40

2 聴覚障害のある子どもの理解と援助44

- (1) 聴覚障害のある子どもの理解 44
- (2) 聴覚障害のある子どもへの援助の方法 46

3 言語障害のある子どもの理解と援助49

- (1) 構音障害（語音症）のある子どもの理解 49
- (2) 吃音（小児期発症流暢症）のある子どもの理解 52

コラム コミュニケーションの工夫 54

第4章**発達障害のある子どもの理解と援助****56****1 自閉スペクトラム症のある子どもの理解と援助56**

- (1) 自閉スペクトラム症のある子どもの理解 56
- (2) 自閉スペクトラム症のある子どもへの援助の方法 58

2 注意欠如・多動症のある子どもの理解と援助64

- (1) 注意欠如・多動症のある子どもの理解 64
- (2) 注意欠如・多動症のある子どもへの援助の方法 66

3 学習障害のある子どもの理解と援助69

- (1) 学習障害のある子どもの理解 69
- (2) 学習障害のある子どもへの援助の方法 70

コラム 一緒に空を見る 71

第5章 重症心身障害のある子ども，医療的ケアを必要とする子どもの理解と援助 73

- 1 重症心身障害のある子どもの理解と援助73
 - (1) 重症心身障害のある子どもの理解 73
 - (2) 重症心身障害のある子どもへの援助の方法 75
 - 2 医療的ケアを必要とする子どもの理解と援助78
 - (1) 医療的ケアを必要とする子どもの理解 78
 - (2) 「医療的ケア児」への援助の方法 80
- コラム 小さな変化に感動 81

第6章 その他の特別な配慮を要する子どもの理解と援助 82

- 1 児童虐待を受けた子どもの理解と援助82
 - (1) 児童虐待を受けた子どもの理解 82
 - (2) 児童虐待を受けた子どもへの援助の方法 83
 - 2 貧困家庭の子どもの理解と援助84
 - (1) 貧困家庭の子どもの理解 84
 - (2) 貧困家庭の子どもへの援助の方法 86
 - 3 外国人の家庭の子どもの理解と援助86
 - (1) 外国人の家庭の子どもの理解 86
 - (2) 外国人の家庭の子どもへの援助の方法 87
 - 4 気になる子どもの理解と援助88
 - (1) 気になる子どもとは 88
 - (2) 気になる子どもの理解 88
 - (3) 気になる子どもへの援助 89
- コラム 人に愛された子どもは，人を愛することができる 90

第7章 障害のある子ども等の保育・教育の実践 91

- 1 指導計画および個別の支援計画の作成91
 - (1) 指導計画（日案・週案・月案・年案） 91
 - (2) 特別な配慮を必要とする子どもの指導計画 91

(3) 個別の支援計画	92
2 個々の発達を促す生活や遊びの環境	96
(1) 子どもとの関係づくり	96
(2) 一日の生活の流れと環境づくり	97
(3) 遊びの環境づくり	101
3 子ども同士の関わりと育ち合い	102
(1) 子どもとの間に信頼の糸を紡ぐ	102
(2) 子ども同士のつながりをつくる	104
(3) 集団の中での育ち合いと課題	105
4 障害のある子ども等の健康と安全	107
(1) 子どもの健康管理	108
(2) 疾病の把握	109
(3) 事故防止	109
(4) 安全対策	110
5 職員間の連携・協働	111
(1) なぜ連携・協働は必要なのか	111
(2) 組織としての子ども理解	113
(3) 保育所・幼稚園等に求められること	114
コラム 踏み切りを作る	115

第8章 家庭および地域・関係機関との連携

117

1 保護者や家族に対する理解と支援	117
(1) 家庭への支援の必要性	117
(2) 障害を受容するとは	118
(3) 保育の場での保護者支援	120
(4) きょうだい児支援	122
2 保護者間の交流や支え合いの意義とその支援	123
(1) 保護者間の交流や支え合い	123
(2) 保護者間の交流や支え合いの支援	123
3 障害のある子どもを支援する制度と地域における連携・協働	124
(1) 障害のある子どもと家族への福祉支援を行う相談機関	124

- (2) 障害のある子どもと家族への療育による支援 126
- (3) 障害のある子どもの自立や社会参加を促進する制度 127

4 小学校等との連携129

- (1) 障害のある子どもの就学場について知っておくことの必要性 129
- (2) 障害のある子どもの就学場（特別支援教育の場） 130
- (3) 就学相談と就学までの流れ 131
- (4) 小学校等との連携 133

コラム お母さんの思い 135

第9章 障害のある子ども等の保育・教育に関わる現状と課題 137

1 障害のある子ども等への保健・医療・福祉における現状と課題137

- (1) 障害のある子ども等に対する母子保健施策 137
- (2) 保育所等における障害児保育の現状と課題 139
- (3) 障害児支援ニーズの多様化への対応 140
- (4) 障害のある子ども等への保健・医療・福祉における課題 142

2 特別支援教育における歴史と現状142

- (1) 日本の障害児教育の歴史 142
- (2) 特別支援教育の現状と課題 145

3 支援の場の広がりつつながり148

- (1) 保育所等訪問支援 148
- (2) 放課後等デイサービス 149
- (3) 民間のサービス（支援活動） 150

コラム 障害児の理美容サービス 151

索引153

障害のある子どもの保育・教育を支える理念

1

障害のある子どもの保育・教育の基本

(1) 障害のある子どもとの出会い

保育者を目指して養成校で学ぶ学生は、在学中に保育所や幼稚園、認定こども園へ実習に行きます。最近では多くの保育所や幼稚園や認定こども園で障害のある子どもを受け入れていますから、実習先で障害のある子どもに出会う機会は必ずと言ってよいくらいあります。実は、その出会いが保育・教育全般に対する学びを深めてくれます。

次のエピソードは、ある学生が実習先で出会った障害のある子どもとの関わりを報告したものです。この短いエピソードの中にも、子どもに対する理解の仕方や関わり方のヒントがたくさん含まれています。

エピソード1-1 気持ちに寄り添って見えたもの¹⁾

【幼稚園での実習】

障害のあるA君（4歳・男児）は、集団行動がうまくできず、すぐに保育室から出て行ってしまいました。ある日、帰りの会の時間に、一人で保育室を飛び出し、隣の保育室へ入ってしまいました。A君は立ったまま動かず、じっと時計を見ていて、私が何と声を掛けても保育室に帰ろうとはしませんでした。

私はA君がなぜそんなに時計が気になるのか、自分の保育室の時計ではだめなのか知りたくなり、A君と同じ目線の高さになるようにしゃがんでみました。すると、時計の秒針が太陽の光に反射して、1秒1秒きらきらと輝いていました。私はとても感動したと同時に、A君はこの光が好きで見とれていたのだとわかりました。A君の保育室では時計の場所が日陰になっていたため光がありませんでした。

私は「きれいだね」と声を掛けながら、少しの間一緒にその光を見ました。その後「また明日も見ようね」と声を掛けると、A君は自分から保育室に帰っていきました。

【学生A. S.】



学生は、「なぜA君は保育室を飛び出し、隣のクラスの時計が気になるのか？」と疑問を持ちました。このように、「なぜだろう？」と考えることが、子どもの気持ちを理解するための大事なポイントになります。

学生はA君と同じ目線で時計を見て、秒針が輝いていることに気づきまし

た。子どもと同じようにやってみるとその子の世界が見えてくることがあります。学生は、「きれいだね」とA君の気持ちを言葉にしました。この瞬間、A君は自分が理解されたことを知り、学生を信頼できる人として受け入れたのではないのでしょうか。A君の気持ちを知ることで、学生はA君を「繊細な感性を持った子」として肯定的に見るようになりました。A君との出会いは、その後学生が子どもの気持ちを見る視点を育むきっかけになったことでしょう。

いかがでしょうか。先ほど「障害のある子どもとの出会いが保育・教育全般の学びを深める」と述べた意味が、何となく理解できたのではないのでしょうか。

次に、障害のある子どもの保育・教育の基本原則について、少し詳しく見ていきましょう。

（２）障害の理解から障害のある子どもの理解へ

はじめに、障害のある子どもを理解するとはどういうことか考えてみましょう。各種障害の定義や特性を知ることによって、障害のある子どもの一般的理解を深めることが可能となるでしょう。一方で、ダウン症候群^{*1}や自閉スペクトラム症^{*2}と言われる子どもたちは一人ひとり違い、それぞれ個性を持った独自の存在です。保育者は、実際に目の前にいる子どもと関わることを通して、子ども一人ひとりの理解を深めることが大切になります。

*1 ダウン症候群については、第2章2 (p.29) を参照。

*2 自閉スペクトラム症については、第4章1 を参照。

エピソード1-2 気持ちを理解する²⁾

【保育所での実習】

自閉スペクトラム症のB君（5歳）は、人懐っこく、笑顔のすてきな男の子でした。ある日、クラスの男の子が、B君が落とした弁当のゴム紐を拾いB君に返してくれました。B君はそれを受け取り、床の上に置きました。男の子は、隣の席が空いていたので「そこに置いたほうがいいよ」と言い、そのゴム紐を拾い席に置きました。しかし、B君は「うー、うー」と言い、再び床に置きました。2人は、そのようなやりとりを何度も繰り返しました。すると、周りの子どもたちが「B君は床に置きたいんだよ」「そのままでいいんだよ」と声を掛け、その男の子もわかったらしく、「じゃあ、床に置いておくね」とB君に言いました。子どもたちは、B君の障害はわからないけれど、B君の気持ちは理解しているみたいで、とてもよいクラスだなと思いました。私は男の子に「ありがとう」と声を掛け、B君にも「よかったね」と声を掛けると、B君はニコニコ笑ってくれました。

【学生S. A.】

このエピソードは、小さい頃から一緒に生活している子どもたちは、障害については詳しく知らなくても、その子の気持ちをちゃんと理解することができるということを示しています。

自閉スペクトラム症という診断名を知ること、障害の特性に応じた対応を考えることが可能となります。一方で、自閉スペクトラム症というフィルターを通して子どもを見ることで、その子の気持ちが見えにくくなることもあるの

で注意が必要です。そのような時は、いったんフィルターをはずして、真っ白な心で子どもを見ると、その子の気持ちが見えてくることがあります。

次に、子どもを理解するために大切な視点について考えてみましょう。

（３）行動を見る視点から気持ちを見る視点へ

津守真は、「行動は、子どもが心に感じている世界の表現である」³⁾と述べています。障害のある子どもは、一見不可解な行動を取ることがあります。そのような行動にも必ず意味があり、大切な気持ちが隠されています。表面的な行動だけを見ていては、その子を問題視して、戸惑ったり、制止したり、叱責したりと的外れな対応をしてしまいがちです。行動の奥にある気持ちを見ようとすることで、その子をより深く、肯定的に理解することが可能になります。

行動は目にとまりやすいのに対して、気持ちは見えません。そのことが、気持ちを見ることを難しくしています。しかし、子どもの気持ちに寄り添う保育・教育を実現するためには、見えない気持ちを見る「心の目」を持つことが必要です。保育者は、図１－１のように、行動だけを見る視点（①）を、行動を通してその奥にある気持ちを見る視点（②）に変換することが求められます。

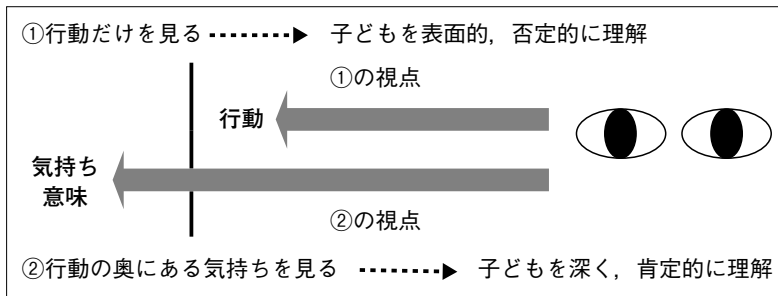


図１－１ 子どもを深く、肯定的に理解するための視点の変換（①→②）

次のエピソードは、筆者が県の巡回相談事業の一環で幼稚園を訪問した際、幼稚園の先生から聞いた話を要約したものです。

エピソード１－３ 「乱暴な行動」の意味⁴⁾

C君（3歳・男児）は発語がなく、幼稚園では一人で好きな虫の図鑑を見たり、園庭で虫を探したりして過ごしていました。そんなC君が、両手を合わせて突き出し（イラスト参照）、他の子を押すことがありました。体の大きなC君に押されると、どの子も押し倒されてしまいます。担任の先生は、他の子をいじめていると思って厳しく叱りましたが、C君の行動はなかなか収まりませんでした。



ある日、先生は、C君が両手を前に伸ばしてクワガタ虫のあごのはさみのような形を作っていたので真似をしてみました。すると、C君は先生の手を取って例の両手を合わせて突き出す形に変えて、自分はクワガタ虫のあごのはさみのような形をしてぶつかってきました。その時初めて先生は、両手を合わせて突き出す形はカブト虫の角を表していて、C君はカブト虫になったつもりで他の子どもと遊びたかったのだということに気づきました。

そのことを他の子どもたちに説明すると、子どもたちも納得してくれて、それ以後C君に押されて訴えにくることはなくなり、C君とカブト虫ごっこを楽しむようになりました。

担任の先生は、C君の行動を真似してみて、その意味に気づきました。先生は子どもたちにそのことを伝え、子どもたちも納得しました。

このエピソードからも、子どもの「困った行動」にも意味があり、その子の大切な気持ちが隠されていることがわかります。保育者は、「困った行動」だけを見て制止したり、叱ったりするのではなく、子どもの行動の奥にある気持ちを理解する姿勢が求められます。

（４）気持ちを受け止め、心を育てる

次に、保育者が子どもの気持ちを理解し受け止めると、子どもはどう変わるのか考えてみましょう。

子どもは、自分が無条件で愛されていると思えた時、人を好きになり、自分を好きになることができるのではないのでしょうか。すなわち、保育者が子どもの気持ちを理解し、受け止めると、その子は人を信頼し、自分に自信を持ち、安心して生活できるようになると考えることができます。そして、このような信頼や自信、安心といった豊かな心が育つと、その子は自分から世界を広げていくことができるようになると思います。

エピソード1－4 不安な気持ちを理解する⁵⁾

【幼稚園での実習】

私が実習させてもらったクラスに、保育室でよく走り回り、転ぶ真似をしてクラスのみんなや先生の目を引く男の子がいました。先生は「保育室では走らないで」「転んだら危ないよ」などその子に声を掛けていましたが、毎日そのようなことがありました。

私がそのことを先生に聞いてみると、「今、母親が妊娠中で、不安定になっているの。父親も仕事で忙しいから、園で気を引きたいみたい」と言っていました。それで、私は、次の日からその子と外で遊ぶようにしました。見かけたら声を掛けて、少しでも接することができるようにしました。すると、その男の子は保育室で走らなくなり、代わりに私の所に来るようになりました。

子どもの不安な気持ちを察し、それに応えることにより子どもも応えてくれることがわかりました。子どもの気持ちを理解することによって、接し方も変わるなと思いました。

【学生H. R.】

このエピソードでは、学生は保育室を走り回る男の子の不安な気持ちを察して、注意するのではなく、その子と遊ぶようにしました。たとえ行動は受け入れ難くても、気持ちを受け止めることはできます。このエピソードは、気持ちに寄り添った対応を取り続けることで不安が安心や信頼感に変わり、結果的に「困った行動」は減少、消失していくということを示唆しています。

（５）気持ちを受け止める関係から受け止め合う関係へ

これまで、保育者が子どもの気持ちに気づき、気持ちを受け止めることが大切だと述べてきました。これに対して、子どもの気持ちを受け止めてばかりいると「わがまま」になるのではないかと心配する声があります。しかし、保育者が子どもの気持ちを受け止めることで信頼関係が深まり、信頼関係が深まると子どもも保育者の言葉に耳を傾け、「こうしてほしい」という保育者の願いを納得して受け止めてくれることが多くなります。

次のエピソードは、市の「心理発達相談」に来た母親から、当時相談員をしていた筆者が聞いた話を要約したものです。

エピソード１－５ 子どもがしていることに付き合う⁶⁾

D君（４歳・男児）は母親と一緒に市の「心理発達相談」に訪れました。その時、母親は「水たまりや側溝などに石を投げ入れるのが好きで、止めさせるのに苦労します」と相談しました。これに対して、私は「子どもがしていることに大人がまず十分付き合っているとよいですよ。その後で誘うと、今度は子どもが大人に付き合ってくれますよ。D君が石を投げたら、お母さんも一緒に石を投げてみたらどうですか」と話しました。

その後、D君が水たまりに石を投げた時、母親は一緒に水たまりに石を投げてみました。すると、D君はうれしそうにどんどん石を投げ入れました。これまではいつも無理やり連れて帰っていたのに、この時は少し経ってから母親が「おしまいにしよう」と誘うと、すんなり帰る気になったそうです。

いつもは制止するか見守るだけの母親と一緒に石を投げた瞬間、D君と母親の気持ちがつながったのでしょう。だからこそD君は、母親の言葉に耳を傾け、「おしまいにしよう」という言葉に従ったのではないのでしょうか。

（６）子ども同士が育ち合う関係を築く

障害の有無に関係なく、人は皆、支え合いながら生活しています。子ども同士が思いやりの心を持って育ち合う関係を築くにはどうすればよいのでしょうか。ここでは、学生が書いた実習のエピソードを通して、子ども同士が育ち合う関係を築くために何が大切かを見ていきましょう。